

1. 国内外のガイドラインから見る 精密検査の実際と方向性

戸崎 光宏 亀田メディカルセンター乳腺科

乳がん検診後の二次検診(精密検査)については、精査施設における検査方法の選択や検査の質など、検討すべき課題が多い。特に、画像診断機器の進歩は著しく、1つの技術をどのように使用すべきかを検証してエビデンスが出る前に、次の新しい技術が誕生するなどのタイムラグが生じている。また、乳腺画像診断は、X線、超音波、MRI、核医学など複数のモダリティを使用するため、1つの技術の検証は複数のモダリティとの競争でもあり、また共存でもある。そして、新技術の位置づけや既存の検査との棲み分けを決定するには、非常に多岐にわたる画像診断の知識と、乳腺診療の豊富な経験が必須となる。

しかし、実際の臨床の現場においては、新しい技術を検証できる環境が整っている施設は非常に限られており、多くの施設はガイドラインに記述される内容に沿って診療が行われている。その意味で、国内外のガイドラインを正確に把握することは重要である。

本稿では、日本乳癌学会の診療ガイドラインの改訂版(2013年版¹⁾)が出版されたため、その改訂のポイントを中心に紹介する。

新しく取り上げられた項目： 「乳房MRIスクリーニング」

遺伝性乳がんの頻度は、わが国の女性では低いという認識があったが、最近の調査で欧米との間に頻度の差がないことが報告された²⁾。それに伴い、日本乳癌学会では、「我が国における遺伝性乳癌患者及び未発症者への対策に関する研究」をテーマとした研究班が立ち上げられ、日本での基盤作りが行われてきた。

このような乳がん発症リスクの高い女性に対するスクリーニング方法として、乳房MRIの価値はすでに欧米で認識され、ガイドラインとして記述されている³⁾。当然、わが国でも乳房MRIをスクリーニングとして用いるべき時代に突入したことは明白である。それに伴い、日本乳癌検診学会で乳癌MRI検診検討委員会が構成され、2012年にガイドラインが作成された⁴⁾。このガイドラインでは、乳房MRIの撮像法が中心に記述されている。

このような背景から、「BRCA1あるいはBRCA2遺伝子変異をもつ女性に対する乳房MRIスクリーニングは早期発見に有効か」という新規の項目が、日本乳癌学会の診療ガイドライン¹⁾に追加されたと考えられる。エビデンスグレードでは「Probable(ほぼ確実)」と評価されている。

乳房MRIスクリーニングの 海外での評価

乳がん検出における乳房MRIの感度は、マンモグラフィおよび超音波検査よりも圧倒的に優れている。もちろん、コストおよび造影剤使用のリスクを考慮すると、生涯発症リスクの高くない一般人に対する検診にMRIを利用することは、現実的ではない。そのため、欧米では、ハイリスク症例を対象にしたMRIスクリーニングに関して多くの研究がなされてきた。2007年の米国癌学会ガイドライン³⁾には、その詳細が記載されている。3818例のデータ(米国、カナダ、イギリス、オランダ、ドイツ、イタリアの52施設)では、マンモグラフィおよび超音波の感度が16~40%であるのに対して、MRIでは感度が77~100%であり、圧倒的に高いことが記されている。これらのデータを基に、欧米では、ハイリスク症例に対してはMRIスクリーニングが推奨されている。

しかし、MRIよりも簡便な超音波は、本当にMRIの代わりにならないのか、という疑問が生じる。特に、超音波の普及しているアジアでは、最も関心のあるテーマである。この問いに対して、EVA trial⁵⁾というドイツでの多施設研究があるので紹介する。687人のハイリスク症例に対して、マンモグラフィ、超音波、MRIの年1回のスクリーニング(1679回)を施行した。さらに、371人に半年ごと